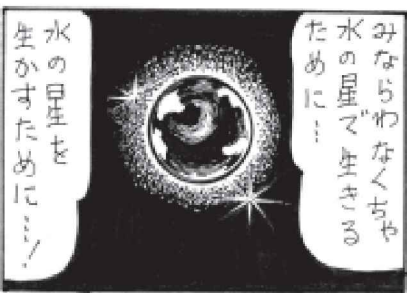
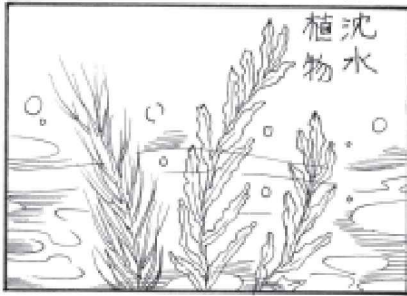


第10回 沈水植物



水生植物のうち、植物体全体が水の中に沈んでおり、さらに水底に根を張っているものを沈水植物といいます。キンギョモと呼ばれるマツモやバイカモなどのように、細長い葉がたくさんついているイメージがありますが、ササバモやエビモなど割合に幅広い葉をもっているものもいます。いずれも水の流れるに逆らわないように適応した形態をしています。水に沈んでいるといっても花をつける植物がほとんどで、目立たない花を水中につけるものもありますが、バイカモ（梅花藻）のように水面に花柄を伸ばして水上に花をつけるものもいます。

現在の河北潟には沈水植物がほとんどみられなくなりましたが、大正時代の文献には潟の中央部にまで沈水植物が分布する図が描かれています。また、複数の聞き取り調査からは、1960年頃までは湖岸からかなりの幅で、アサザなどの浮葉植物とともに、櫓に絡まるほどの沈水植物帯が存在していたようです。永坂（1997）によると1957年以前には10種の水生植物が生育していました。しかし、1995年には、新たに入ってきた外来種1種を含む5種の沈水植物が確認されただけでした。とくに干拓事業後に水生植物の多様性が減少したと思われます。沈水植物の減少には複雑な要因があると思われませんが、干拓事業の際に水が攪乱されたこと、湖岸が全てアスファルト護岸となったこと、水質の悪化などが原因と考えられます。

沈水植物は、メダカなどの水生動物の生息場所となる他、水中への酸素の提供、水質浄化への貢献など、水域の環境改善にとって重要な役割を持っています。しかし河北潟では、湖岸環境の悪化により沈水植物の減少が起こり、沈水植物の減少がさらなる環境の悪化を促すという、負のスパイラルが起こっていると思われます。一方、琵琶湖の南湖では、1990年代には緑白色をしていた水が、1994年の濁水による水位低下

を契機として、沈水植物に光が届くようになり、その結果2000年には、クロモなどの繁茂とともに、著しい水質の改善がみられたことが報告されています（浜端，2005）。

現在湖岸にはほとんど沈水植物がみられませんが、潟周辺の農業用水路や干拓地内の浸出水の流れ込む水路などには、何種類かの沈水植物が生育しています。これらは、河北潟本湖と繋がっていますので、湖岸の沈水植物の復活の「種」は存在しています。琵琶湖のように何らかの契機により、湖岸の沈水植物群落の復活が起こらないとも限りません。そのためには、湖岸形状の改善や水質改善の努力により、これらの植物が生育できる条件をつくっていくことが必要です。琵琶湖南湖で起こったことは、河北潟が負のスパイラルから脱却して、青々とした沈水植物が揺らめく透明度の高い河北潟の水辺の復活が、決して不可能ではないことを示しています。（文 高橋 久）